

入学おめでとう



中央大学で「行動する知性」を磨いて未来を拓こう



学長
福原 紀彦
FUKUHARA Tadahiko

今春、中央大学に学びの場を求める皆さんを、教職員一同、心から歓迎致します。皆さんが大学進学のために重ねられた努力を讃えますとともに、本学への入学をお祝い申し上げます。

中央大学の起源は1885年に設立された「英吉利法律学校」に遡ります。その建学の精神は、「**實地應用ノ素ヲ養フ**」というものです。経験を重んじ自由を大切にするイギリス法の教育を通じて、品性の陶冶された人材を育成し、わが国を近代的な法治国家にすることを目指しました。中央大学はその後、「白門」を象徴とする135年に及ぶ歴史と伝統を築きながら、総合大学として発展し、建学の精神を社会で実践することを使命としてきました。このことは、今日、8つの学部、7つの大学院研究科、2つの専門職大学院研究科による多様な学問研究と幅広い実践的な教育を通して「行動する知性。—Knowledge into Action—」を育むという本学のユニバーシティ・メッセージとして受け継がれています。

こうした歴史と伝統と実績にもとづき、さらに、未来を展望し、中央大学では、入学者選抜の方針(アドミッション・ポリシー)、学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)、および、教育課程の編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)を定めて、皆さんを迎え、充実した学修環境を提供しています。さらに、本学には、そうした学修環境に加えて、学術・文化・芸術・スポーツ・ボランティア等の学生中心の素晴らしい活動が盛んです。それらは、キャンパスという空間を活用して、また、教職員、御父母、OB・OG、社会・地域等との連携によって、実り豊かに形成されています。それらの機会こそ、本学の歴史と伝統を築き、未来を拓く貴重な礎であるといっても過言ではありません。

今日、大学に学ぶ人たちは、著しい変化を遂げる未来社会を拓きながら、自らの人生を築く世代です。Society5.0とも称される近未来の人類社会は、情報化がいつそう高度化し、AI・データサイエンスが牽引する知識基盤社会です。そこでは、与えられた情報から必要な情報を引き出して活用することができるリテラシーに加えて、獲得した知識と技能を生かし、未知の課題であっても創造的かつ自発的に取り組むことができる「コンピテンシー」を身につけ、グローバルな視点と発想で活躍できる能力と資質が求められます。本学の建学の精神である「**實地應用ノ素ヲ養フ**」という表現にある「素」とは、このコンピテンシーにほかなりません。

そして、「知性」とは、単なる知識や技能の集まりではありません。身に付けた知識や技能が体系化され、どのように社会で役立つかが理解されたときに、それは、知性と呼ばれます。知性は公共のために存在しなければなりません。知性を社会で生かしたくなるところにこそ「志」が生まれるのであって、自己利益の追求だけで存在する意欲は志とは言えず、公共のための知性に支えられてこそ志と言えます。大学では知性を獲得することが大切であり、とくに中央大学で学ぶのなら、知識と技能の獲得に終わらず、志を生み出す知性としての「行動する知性」を身につけていただきたいと思えます。

新入生の皆さんが、本学の豊富で特色ある環境を活用して、大いに学業に励み、さまざまな活動に参加して学修経験を積み、それぞれの資質と能力を磨き高めて、大きな成長を遂げられることを期待致します。大学在学中に巡り会う人間関係やさまざまな機会を大切にして、中央大学における学生生活を元気に過ごしてください。皆さんのご健康とご活躍を心から祈念して、お祝いのご挨拶と致します。

中央大学法学部へようこそ —「行動する知性。」—



法学部長
猪股 孝史
INOMATA Takashi

新入生の皆さん、ご入学、おめでとうございます。皆さんが中央大学法学部に入学されたことを歓迎いたしますとともに、心からのお祝いを申し上げます。また、この日に至るまで、新入生の皆さんを励まし、支えてこられた、ご家族の皆さん、そしてご関係の皆さんにも敬意と敬意を表します。

中央大学法学部の歴史は、若き18人の法律家たちによって、1885(明治18)年に創立された「英吉利法律学校」にまでさかのぼります。経験を重んじ、自由を尊ぶイギリス法(コモンロー)の教育を通して、実社会が求める人材を養成しようとしたのであり、「實地應用ノ素ヲ養フ」という建学の精神は、ここから導かれました。

抽象的体系性よりも具体的実証性を重視し、普遍的で恒久的に有効な原理原則を探索しながらも、社会に生起する時々の課題を自らの課題として捉え、現実的で妥当だと思われる解決を模索していこうとする態度を、ここに見て取ることができます。そしてそれは、法律学や政治学の専門的知識を基礎に、課題の解決に向けて、強い意思をもって行動に移す力、「行動する知性。」というメッセージに受け継がれています。

これまでの学びは、解くべき問題が与えられ、その正解に至るまでの道筋を教えられ、そしておそらく、それを覚えるというものであったことでしょう。こうした学びももちろん大切です。しかしながら、大学での学びは、何が問題かを見出し、何ゆえにそれが問題となるのかを考え、その問題の背景や原因を探り、解決を模索し、そしてそれが妥当かどうかを検証する、こうした作業を積み重ねていくことにあります。そうした学びを通じてこそ、皆さんは、中央大学法学部の伝統、学風を受け継いでいくことになるはずです。私たち、中央大学法学部の教職員は、新入生の皆さんを支援し、協働するために存在します。いつでも遠慮なく声をかけください。

大学というところは、規律ある自由にあふれています。自由な未来をどうするか、それは新入生の皆さんの手の中にあります。学問を究めるもよし、資格試験の準備に邁進するもよし、クラブや部活動に熱中するもよし、海外留学して見聞を広めるもよし、ボランティア活動に勤しむのもよし、どのようであれ、中央大学法学部で、無限の可能性を追求しつつ、「行動する知性。」を身に付けてほしいと願って、お祝いの言葉とします。

中央大学経済学部という選択は…



経済学部長
山崎 朗
YAMASAKI Akira

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。中央大学経済学部教職員一同、皆さんのご入学を心から歓迎いたします。

中央大学経済学部は、法学部に次ぐ中央大学で2番目に歴史のある学部です。大学令で経済学部として認められたのは、東京帝国大学、京都帝国大学の経済学部の1年後の1920年です。経済学科設立から数えると、中央大学経済学部は115年の歴史があります。

中央大学経済学部の特色は、①歴史のある経済学部であること、②大規模な学部であること、③先進的な学科構成であること、④インターンシップや奨学金制度が充実していること、そして⑤本物に出会える機会が多いこと、にあります。

中央大学経済学部の1学年の定員は1062人です。法政大学経済学部は876人、明治大学政治経済学部経済学科は695人、立教大学経済学部は680人、青山学院大学経済学部は539人です。確かに、偏差値のことだけを考えれば、定員を600人規模にした方が良いのかもしれませんが、定員を削減すれば教員数や開講科目数も減らさないといけなくなります。大規模な学部だからこそ、他大学の経済学部にはない幅広い(ユニークな)科目も用意されています。きっとこれまで気づかなかった新しい視点に出会えるはずですよ。

中央大学経済学部は先進的な経済学部です。国際系学部の新設が相次いだ1990年代よりも30年前の1962年に国際経済学科を設置し、国連総会でSDGsが承認された2015年よりも早く1993年に公共・環境経済学科を設立し、公共経済学、環境経済学の研究・教育の拠点となることを目指しました。

また、AIやデータサイエンスがまだ話題にすら上っていない2007年に産業経済学科を経済情報システム学科に改組しています。日本の経済学部のなかで、もっとも充実した情報教育を行っていると自負しています。いまではインターンシップという言葉は一般的になりましたが、他大学に先駆けてインターンシップ制度を導入したのも、中央大学経済学部です。現在は、海外インターンシップも実施しています。

2019年度の経済学部の卒業生に対するアンケートでは、「入学前と比較して、『中央大学はよい大学だ』という思いは強まりましたか」という質問に対する肯定的回答は89.2%でした。全学部平均の86.5%よりも高くなっています。

新入生の皆さんと教職員との協力によって、卒業時に「入学前と比較して、『中央大学経済学部はよい学部だ』という思い」が強くなる未来が訪れることを切に願っています。

「普通に存在している以上の状態」に到達するために



商学部長
渡辺 岳夫
WATANABE Takeo

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。商学部の教職員を代表して、皆さんにお祝いの言葉を申し上げますとともに、皆さんが中央大学商学部の学生となられたことを心より歓迎いたします。

さて、あなたは普段の生活のなかで、どれだけ「普通に存在している以上の状態」に到達したことがあるでしょうか？「それってどんな状態？」という声が聞こえてきそうですね。簡単にいえば、それは時間が経つのも忘れるくらい何かに熱中・没入している状態のことです。趣味の好きな何かや学校の部活をしている時、あるいは勉強(!?)をしている時に、そんな状態を経験したことがある人もいないのでしょうか。経験者に尋ねます。あとから考えてみて、そんな状態に到達したときの気分はいかがでしたか？

多くの心理学者が、その状態を「存在の本質的状态 (a state of being)」と呼び、人が精神を健康に維持するうえでとても大事なことでと指摘していますが、中にはそういった状態を経験できない人生は人生ではない、とすら言う人もいます。もちろん、何かを経験することによって得られる「結果」も大事でしょう。例えば、部活の試合で「普通に存在している以上の状態」に到達し、そして結果として試合に勝ったこと、また、絵を描いている時にそんな状態になったとして、完成した絵の出来栄がとて良くて周囲から褒められたことなど、それらの「結果」も確かに努力したことへの「しるし」として意味はあるでしょう。でも、それよりもずっと大事なのはやはり、何かに熱中して時を忘れるような、そんな状態に達することそれ自体なのです。

では、そうなるために求められることは何でしょう。最も大事なことは、とにかく熱中できる対象を見つけることです。大学生活は、誤解を恐れずに言えば、自分が生涯をかけて熱中して取り組むことのできる何かを見つけるための「旅」です。一か所に長く滞在する旅もあれば、限られた期間の中で多くの場所を訪れる旅もあります。あなたは、あなたなりの旅をして、自分の生涯の「宝物」を見つけてください。

熱中できる対象を見つけたら、それに熟達するプロセスで必要な知識やスキルを身につけなければなりません。優秀な外科医は手術中、必要な手順やスキルをほとんど意識せずに行使し、局面に没入しつつオペを遂行するそうですが、それを可能にするのは、実は豊富な知識や経験を伴ったスキルなのです。あなた方も、あることについて段々上手になっていくにつれ(つまりスキルが伴うようになってきて)、どんどん楽しくなり、集中できるようになった、という経験があるのではないでしょうか。熱中するのにも必要な条件があるのです。

あなた方がその条件をクリアすることができるよう、中央大学の教職員は精一杯応援します。大事な宝物を見つけ、それに熟達するための楽しい旅に、一緒に出発しましょう！



理工学部長
榎山 和男
KASHIYAMA Kazuo

理工学部・理工学研究科にご入学の皆さん、入学おめでとうございます。

さて、現在はグローバル化の時代と言われて久しいですが、皆さんは“国際化”と“グローバル化”の違いはお分かりでしょうか。簡単に言うと、国際化は国を意識した国同士の活動等であり、グローバル化は国ではなく世界共通を意識したものです。そして、いま日本の企業の多くはグローバル化に大きく舵を切っています。その理由は簡単で、日本の将来人口が減少していく中(皆さんが定年を迎える2065年頃には現在の約7割に減少する予想)、収益や活動の規模を維持・向上させるとなると、市場・労働力を海外に求めるしかないためです。

このため、日本のグローバル企業では、海外進出を積極的に行うとともに、公用語を英語にしたり、採用の際には英語検定試験のスコアが基準以上でなければ門前払いしたりする事例が増えています。日本で働いていても、英語は避けて通れないというのがグローバル社会です。また、グローバル化の観点から企業だけでなく大学も、世界共通の目標・課題である「SDGs」を意識した研究に取り組んでいます。

理工学部では、グローバル社会で活躍できる人材育成を行うため、志向の異なる短期留学・海外インターンシッププログラムを多数用意しています。また皆さんの多くは大学院進学を考えるとと思いますが、大学院では英語による専門の授業も用意されており、大学院生の多くは国際会議で研究発表をしたり、英語で論文を執筆したりします。これからは、英語は学問としてではなく、情報発信やコミュニケーションのためのツールとして捉えてください。

ところで、大学誕生のきっかけは中世のヨーロッパの都市部において職業の選択の自由が与えられたことに大きく起因していると言われていています。それまでは、職業は世襲制でしたが、職業の選択の自由が与えられたことを契機に、職人や商人を養成することから始まり、次第に一般の学問を教えるようになったと言われていています。まさに、キャリアデザインを行うために生まれたわけで、大学に入学される今こそ、この点についても認識して、自分のキャリアデザインを描いてほしいと思います。

いま、科学技術が社会を大きく変える変革の時代を迎えており、科学者・技術者の出番は今後益々多くなることが予想されます。グローバル社会で活躍できる理工系人材を目指して、一緒に学問を楽しみましょう！

異なるものとの「出会い」



文学部長
宇佐美 毅
USAMI Takeshi

中央大学新生の皆さん、入学おめでとうございます。中央大学は、学問の楽しさや奥深さを存分に味わえる場所です。学業以外にも、学生生活を充実させる要素がたくさん用意されています。これからその場所で、大いに学び、大いに学生生活を楽しんでください。これから皆さんは、今まで出会わなかったような人びと、出会わなかったような考え方に接することでしょう。その「出会い」をどうか大切にしてください。

「出会い」とは、通常は知らないものと初めて出会うことをいいます。たとえば、この社会にはさまざまな年齢の人がいます。この大学では、かなりの年齢差のある人びとが集まっています。皆さんより10歳以上も年上の大学院生もいるでしょうし、中学や高校なら定年退職しているような年齢の先生が皆さんの前の教壇に立つかもしれません。そんな年齢差の中で感じる埋めがたいギャップもあるでしょうし、だからこそ学べることもたくさんあります。

また、「出会い」とは、知らないものと初めて出会うだけでなく、知っているはずのものあらためて出会うことでもあります。たとえば、この世界には男性と女性がいます。それは誰でも知っていることでしょう。しかし、お互いに知らないことは山ほどあります。同性同士でもわからないことがあります。

さらにいえば、男性と女性という単純な二分法では割り切れない性のありかたがあることも、本当の意味ではわかっていないのかもしれません。わかったつもりでいたことをあらためて考えることも、大切な「出会い」なのです。

大学とは、そうした異なるもの同士が協力したり切磋琢磨したりしながら、新しい何かを作っていくところの場所です。これからの時代にあっては、世界的な規模で協力をしていかなければ解決できない問題がますます増えていきます。そのような社会にあっては、同じ性質を持つ者同士が団結するだけではなく、異なるもの同士がどのように触れ合っていくのか、どのようにお互いを理解し合って共に生きていくのか、ということがもっとも大切な課題になるでしょう。

皆さんはこの中央大学という場所で、多くの異なるものとの「出会い」を経験しながら、大いに学んでください。それが、人間の文化と社会のこれからについて考えることに、必ず結びついていくことでしょう。



総合政策学部長
青木 英孝
AOKI Hidetaka

新生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんのこれまでの努力に敬意を表し、教職員一同、心から歓迎いたします。また、皆さんをこれまで支えてきてくださったご家族に対しても、心からお喜び申し上げます。

最高学府と呼ばれる大学での学びは、与えられた知識を覚えることが中心だった高校までの勉強と決定的に異なります。何を学ぶか、いつ学ぶか、どうやって学ぶかなど、皆さんの自由裁量がとても大きくなります。好きなことを学べるので、出発点として、好奇心やさまざまなことに疑問をもつことが大切になります。また、比較的自由であるが故に、自律的であることも求められます。皆さんには大きな可能性があります。しかし、ボーっと過ごしてしまうと、何にもならない可能性も同じくらいあることに留意してください。

学問は、スポーツや芸術と似ています。基礎を習得する段階では結構な労力を要します。部活やクラブ活動で、一見単純な基礎練習を日々繰り返した人も多いと思います。でも、基礎を固めたからこそ、それを自由に用いる楽しさが待っていたはずで、大学での新しい学びでも基礎固めの地道な努力が必要ですが、大学時代に真剣に取り組んだ学びはこれだ！と言えるよう、興味のある研究テーマを見つけて学問の楽しさを実感してください。

ところで、なぜ富士は高く美しい山なのか。それは裾野が広いから。自分自身を高めるために、多様な学問に触れ、多くの経験を積んで視野を広げてください。総合政策ではぜひ、複眼思考を会得してほしいと思います。面倒なことに、ある良い施策は別の視点から見ると悪手かもしれない。例えば、通信技術の発達、スマホの普及は生活を便利にしましたが、仕事に縛られ心を病むかもしれませんし、SNSが原因の自殺が起きてしまうかもしれません。さらに、ある時点での正解が後に不正解になることもある。社会問題の場合、テストのように正解が一つしかないケースは稀です。正解がない場合も複数ある場合もある。白か黒かの二択でなく灰色も多い。だからこそ、複眼思考が大切なのです。

最後になりますが、人生の方向性を決める、あるいは人生に大きな影響を与えるのは、得てして先人の知恵が詰まった書物か、人との出会いだと思います。大いに勉強し、スポーツを楽しみ、文化芸術に触れ、生涯の友人を得るなど、中央大学で過ごす時間が人生の宝物になりますように。大学時代の経験を通じて、大きな自信を手にしてほしいと思います。

中央大学で学び、大きな自信を。

Open a gateway to the world!



国際経営学部長
河合 久
KAWAI Hisashi

I would like to extend our congratulations on your admission to the Faculty of Global Management – GLOMAC. This year is the second year since GLOMAC's founding, and, like the first year, it is still in a stage of development. In that sense, you are one of the members who are helping GLOMAC to evolve, together with the faculty and staff. I look forward to your active participation.

Companies today actively develop their business overseas. According to a certain survey, such companies face three major challenges. The first challenge is to secure human resources to carry on overseas business, the second challenge is to understand the regional and cultural characteristics of differing countries, and the third challenge is to develop business strategies conforming to each country's unique circumstances. When we view global management today, becoming a global talent requires not only a command of English and an understanding of different cultures, but also a mastery of basic knowledge and practice related to business management and operations. Therefore, it is important to have a business mind with excellent information literacy and analytical skills as well as to have the ability to act positively and cooperatively in a challenging environment built on the premise of diversity.

Apart from the importance of academia, the four years of college life will provide a great opportunity to make life-long friends, to think about your own living style and to prepare yourself for a long life. University learning outcomes do not appear in a short time. Rather than judging things just after admission, please spend your days meaningfully so that you can see how much you have grown in four years. The gateway to the world cannot be opened so easily. I wish you a bright future.

AI時代の「エルシーELSI」を学ぼう



国際情報学部長
平野 晋
HIRANO Susumu

AI(人工知能)は、ヒトから多くの職業を奪うのではない。AIは差別的な判断を下すのではない、等とAIの欠点が指摘されるようになりました。それにもかかわらず、今後AIはどんどん普及し、ヒトも社会もAIに依存することでしょう。皆さんが生き残るためには、この4年間を、AIには奪えない能力を伸ばす機会とすべきです。

その能力とは主に以下の3つと言われていますので、今後4年間の学びの参考にしてください。①数値化・定型化できない能力(すなわちAIが学習できない能力)、②ヒトの気持ちや文脈・空気を理解したコミュニケーション能力、そして③独創性。

更に皆さんには、社会をより良く良化するための素養も、この4年間で修得してほしいと思います。その素養は「Ethical(倫理的)、Legal(法的)、and Social(社会的)、Implications(含意)」の頭字語である「ELSI」(エルシー)を考える素養です。例えばAIが下した判断が、科学的にビッグデータに基づいて判断したからといって鵜呑みにすることなく、それが差別的な判断であれば、たとえデータに基づいていても「NO」と言える素養が、「ELSI」素養です。

AIはヒトが使う道具であって、ヒトがAIに支配されてはなりません。私が参画する機会を得た内閣府のAIに関する有識者会議の名称が、「人間中心のAI社会原則検討会議」となっている理由も、AIがヒトに貢献するための道具であるという意味を表したかったからなのです。さらにその会議で私は、「FAT」と略称される「Fairness(公正)、Accountability(説明責任)、and Transparency(透明性)」を「AI社会原則」に含めるべきだと主張して採用されました。このFATの原則は、AIが単に科学的にできることを追求するだけではなく、その内容がそもそも社会的に受容できるものでなければならないという、ELSI素養の重要性を表した原則です。

このELSI素養を修得するためには長い時間と教育が必要です。幸い中大が提供する教育や課外活動は、そのようなELSI素養を身につける上で絶好の機会を提供してくれます。皆さんには卒業後もAIに仕事を奪われることなく、かつ社会の良化に貢献できる人材になるべく、中大生としての4年間を無駄なく最大限有効に活用ください。